

三 Mi'Te

◆詩と批評◆第154号◆ 2021年◆春◆季刊

【特集：東日本大震災後10年】

中村祥子 Nakamura Sachiko

金野孝子 Kinno Takako

鈴木余位 Suzuki Yoi

イナン・オネル Inan Oener

笠岡直穂子 Kasama Naoko

高野吾朗 Takano Goro

樋口良澄 Higuchi Yoshizumi

新井高子 Arai Takako

・本・

〈詩集〉中村祥子『まぶしい朝が来て』私家版(sachiko.suzusiro@gmail.com) (1100円) 新刊!

高野吾朗『百年経ったら逢いましょう』花乱社 (2200円) 新刊!

金野孝子『山吹』私家版、岩手開発産業株式会社印刷

新井高子『ベットと織機』未知谷 (2200円)

〈翻訳小説〉モーパッサン著、笠岡直穂子訳『わたしたちの心』岩波文庫 (924円)

〈評論〉樋口良澄『鮎川信夫、橋上の詩学』思潮社 (2970円)

〈訳詩集〉イナン・オネル訳『アタオル・ベフラモール来日記念詩集』私家版

・お知らせ1・

Edited by Jeffrey Angles 『Factory Girls: Selected Poems of Takako Arai』(Action Books, 2019)が、第1回 Sarah Maguire Prize (非英語圏詩人の英訳詩集への国際的賞)のノミネート6冊に入りました。受賞は、Yang Ling (楊煉), Translated by Brian Holton 『Anniversary Snow』(Shearsman Books, 2019)。

・2・

『世界文学としての〈震災後文学〉』(木村朗子&アンヌ・バヤール&坂井編、明石書店) 新刊! 樋口「見たものを覚えていることができる/忘れることができる——船屋法水『ブルーシート』における当事者性」、新井「声の豊穣——震災後文学が拓く東北弁文学の可能性」等を収録。

・3・

管啓次郎「詩、集合性、翻訳についてのノート」(『翻訳と文学』(佐藤=ロスベアグ・ナナ編、みすず書房、新刊)所収)で、新井編著『東北おんぼ訳 石川啄木のうた』(未來社)が論じられました。4/16にオンライン書評会開催。https://www.ms2.co.jp/news/event/08987-review20210416/

・4・

樋口のエッセイ「坂川さんのこと」『坂川事務所の仕事展1』図録(queue gallery) 新井の論考「『東北おんぼ』の屹立——土地ことばの精霊」『現代詩手帖』3月号(思潮社) 新井の映像詩「花園」『Web 新小説』3月号(春陽堂書店) https://shinshosetsu.com/

・5・

World Poetry Day (3/21)、ユネスコの世界的オンライン朗読会(テーマ「方言」)に、田中庸介、柏木麻里、上田假奈代、新井が出演。https://poesia.world/hub/east-southeast-asia-oceania で視聴可。

・6・

コロナを巡る詩の1年リレー『空気の日記』(編集・松田朋春)が完結。https://spinner.fun/diary/

・7・

大学生の詩の掲載誌『インカレポエトリ 第4号 鯨』刊行。https://twitter.com/incollepoetry

・8・

映画『東北おんぼのうた』が、毎日新聞(2/16夕刊)、岩手日報(2/24)等で紹介されました。

【後記】震災特集を組み、金野さん、鈴木さん、中村さん寄稿、ジェフリーさんの詩はお休みです。

編集: 新井高子 / 発行所: ミテ・プレス / 発行日: 2021年3月31日(水)

寄付を随時受け付けております。郵便局口座: 10090-74894051 名称: ミテノカイ

E-mail: mite@acc.ocn.ne.jp

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

あれから十年

金野孝子

早^{はや}アなア
十^{じゅう}年^{ねん}が経^へったア
あれから あれからア
あれからよう

三月十一日

あの^{あの}大津波^{おほつなみ}ア平和^{へいわ}な暮^くらしよば
さらってすまたア
そんでも みんな^{みんな}立^たち上^あがったア
「ちよんてア だめだア」
「穏^{おだ}やかな暮^くらしう 呼^よばんねばなんねア」

いぎなり 真^まつづぐん^{せな}なつた背^せ中^な
ギガギガと光^まった眼^{まなこ}
悲^{かな}すう 涙^{なみだ}ば 喉^{のど}の奥^{おく}き流^{なが}すてやつて
お天^{てん}道^{どう}ま^まにア 手^てつこ^あ合せで
歩^あぎ出^だすた十^{じゅう}年^{ねん}の月^{つき}日^ひだつたア

なんだアかんだア 語^{かた}つたつて
これも あまだ^ひの人^{ひと}アどの 友^{とも}えアあつたればよそだア
幾^{いく}重^えにも
感^{かん}謝^{しゃ}申^{まう}す上^あげねばなんねア

今日^{けふ}も はつきと見^みえさう
海^{うみ}イ遠^{とほ}く^おにはた丘^{かみ}さ 建^たで^まら^なれた学^{まな}び^{しよ}のお城^{しろ}—
保^ほ育^{いく}園^{えん} 小^{しょう}学^{がく}校^{こう} 中^{ちゅう}学^{がく}校^{こう}アよう

そすて
子^こ供^{ども}アどう わらわらと 坂^{さか}ア上^あが^あつてく姿^{すがた}もれア

*ちよんてア だめだア：郵^{ゆう}が^がないで^では^はだ^だめだ

中村 祥子

思い出すままにつづる東日本大震災の記憶は、時系列が曖昧だ。意外な場所から当時のメモが出てきて、忘れていた光景がよみがえる。

実家の父を病気で看取った三月十二日の朝にも、大津波警報は続いていた。遺体を実家へ運ぶには、死亡診断書が必要だ。だが、繰り返して襲ってくる津波と余震で、医師も看護師も交替が来ない。二十四時間以上も激務を続けているのに、早くなんて頼めるわけがない。

「連絡手段がないので、そのまま病室で待っていて」

そう言われたが、電話が通じないのは私も同じだった。父の死を家族に知らせるためには、自分で動くしかない。震災発生時、病院へ見舞いに来ていた家族、義理の両親と夫と娘たちは海岸近くの自宅へは戻れず、私の実家に避難していた。「一時間だけ」と約束して病院を出たが、高台にある病院の駐車場は避難車で大渋滞していた。これでは何時間かかるかわからない。あきらめかけたが、実家の様子も気になる。そのまま徒歩で実家へと向かった。

実家は津波の浸水は免れたが、地震で壁や天井が落ち、家具は倒れて割れた食器が散乱していた。停電で暖房もなく断水でトイレも使えず、食糧の蓄えもわずかだった。しかし、家族が暗い顔をしていたのは、浸水地域で働いていた夫の妹が消息不明だったからだ。一旦は病院へ戻ったものの、今度は「夕方までに」との返答。もはやじつとしてはいられなくなって、水没した会社の近くまで歩く。

すると、長靴にヘルメット姿で三陸鉄道を歩いて来る男女がいた。一時間かけて逃げて来たと言ふ。

「この先には、もう道もないよ。家も店も学校も、何もかも全部やられた。人捜しなんて絶対に無理だから」

ためしに線路の上を歩いてみたが、地震でうねった鉄橋はいたる所で崩落し、下は流失物が漂う川だ。その危険な鉄橋の先は、さらに真っ暗闇の長いトンネルだ。

「二次災害になる。あきらめよう」

義妹に会えたのは、その翌日、三日目の夕方である。

互いに幽霊ではないか、夢ではないかと抱き合つて号泣した。地震直後に車を運転して自宅へ向かっていた妹だが、「いきなり水が道路からわいてきた」そうだ。そのまま走つて水をたまりを越え、ふとバックミラーを見ると長く続いていた後続車がみんな消えていたらしい。

家を流された妹は避難所にいた。しかし、町外の帰宅困難者である私たちは、給水や炊き出し、避難所の場所さえ知らなかった。そこで四日目、隣町にある市役所へ行く。

伝言や消息の掲示板が設置され、無料の新聞が配布されていた。新聞を読んだのは震災後初めてで、原発事故の記事にまず驚く。五日目には、自衛隊による瓦礫撤去で、孤立した地域にも仮設道路が通つたことを知る。

「作業は日の出から日没までで、作業用の通路が夜間だけ利用できるらしいぞ」

その情報をたよりに、六日目の未明、夫と二人で自宅を見に行った。一時間ほど迂回して、午前三時に町の中心部へ入つたとたん、海水と油の刺激臭が車内に充満した。

瓦礫をかき分けた壁の高さは二メートル以上。迷路のような谷間の道は、どこどこで車一台の幅しかない。のろのろ運転で歩いた方が早いくらいだが、深い闇と異様な静けさにはひるんで、窓も開けられなかった。

白々と夜が明けると、ダダダダ……と救機のヘリコプターが飛んで来た。重油だらうが、町全体が黒く染まっている。まるで空襲で焼け野原になったみたいだ。

そう思つてトキッとした。予知夢と言つたら大震災だが、震災の二ヶ月前に見た初夢と同じ光景だった。

初夢を教え合つのは我が家の恒例行事で、私は「町が丸焼けだった」と家族に話していた。

「空に何機もヘリコプターが飛んでいたから、戦争が何か、大変なことが起こるのかも。みんな、気をつけて」

道はぐねぐねと折れ曲がる。倒壊した家屋や飛び出す金庫片をよけ、防潮堤に乗り上げた大型船の下をくぐり抜ける。無数の釘や鋭い破片でタイヤはすでにパンクして、数分の距離を一時間かけてやっと集落へと入る。

高い石垣は一部が崩れて津波の痕跡もあつたが、たどり着いた先に自宅はちゃんと残つていた。しかし、浜に嫁いでからの二十五年間、手伝つてきた養殖漁業は壊滅していた。牡蠣やホタテの養殖物だけではなく、船一艘だけでも家が何軒も建つ。借金をしても返せる保証はない。設備被害の甚大さに、高齢の義父母は廃業を決意した。

漁民たちは先祖代々のこの土地で家業を守り、雨の日も風の日も年中無休で肉体を酷使してきた。一度の大津波で苦勞してきた義父母の人生を重ね、その虚無感に寄り添う言葉が見つからない。しかし、漁業を生業にしてきたからこそ、海が憎いとは絶対に言わなかった。

「あらゆる生命の起源は海だ。たくさんの命は、海へと還つていったのだ」と八十代の義父は語る。

命を育む海の、巨大な輪廻。それを想うとき、軽率だと評された自分の詩が念仏のように湧き上がってくる。

つなみはなみだ／なみだもなみだ／ああ、なみだもなみだも／海がふるさと

『つなみはなみだ』より

映画『東北おんばのうた — つなみの浜辺で』

一般公開のお知らせ

* 鈴木余位(監督)より

この映画の、そもそものきっかけとなったのは『東北おんば訳 石川啄木のうた』(新井高子編著 未来社 二〇一七年)という本でした。新井さんに声をかけられた二〇一八年一月、私が初めて大船渡を訪ねてから約二年を経て、そのタイトルが「おんば訳」から「おんばのうた」に「石川啄木」は「おんば」となつて、映画となりました。

この主体の変化、そしてそこに内包される時間そのものが、この映画の根幹だと思っています。

決して、いわゆる「震災映画」をつくらうとしたわけはありませんでした。ただ、ここには二〇一一年の大震災からの一〇年、いやもつと遥か昔からの確かな生き継がれた時間が含まれています。

「ドキュメンタリー映画」を求めたわけではなく、決してドラマティックに、感情を煽るようなこともしたくはなかった。なにかを掴みにいくような振る舞いも極力避けました。未だに、これが映画だ、監督だ、と主張するつもりは全くありません。

それでもアーカイブの必要性、必然性、そして可能性への接触は少なからずできたのではと思っています。もしかすると、映画、というジャンルで語るよりも広い意味合いがあるのではないかと考えています。

声を映やした土地に生き続けたおんばたちの語りが朗読となり、そして人生がおんば訳され、またその土地に還つていく。入り江にたゆたう、静かな波のように。その循環がしたたかに、ときには必要なエコーをもつて続いていく。続けていく。たとえそこに大きな巨災があるとしても。

そしてまた、その続けていく人や土地の姿を見て、聴き続けていくことの方、というのもあるのではないのでしょうか。主役は常に翻訳される、そう、お茶会にひよこり顔をだすようにして。

この映画の態度というものをそんな場所に置き、そうであつてほしいと思っています。

* 新井高子(企画制作)より

かねてより土地ことばに興味をもっていたわたしと岩手県大船渡市のおんばたちのおつきあいが始まつてから、かれこれ六年半になります。訪ねるときには、じぶんの住む横浜で買ったお菓子を買いますが、おんばたちのほうも、手作りのお漬物などとともに待っていてくださる。そして、いつしよに「お茶こ」をする。

そんなゆるまいのなかから一冊の本を作りましたが、文字領域が活動の場のわたしが、映画を企画制作したのは、声のことばのなかにある、おんばたちのこの上ない豊かさ、明らかさを伝えるには、映像がもつともよざわしいと、よく自然に思えたからです。親しくなつたおんばの人生、こども時代やつなみの体験や気仙弁への思いを、その傍らに座つて、じかにうかがいたいという気持ちもふつと湧いてきていました。

これは、なんらかのテーマを究める、いわゆる作品というよりも、そんなおつきあいの流れのなかからおのずと生まれ出た産物といったほうが、むしろしつくりくるまんな気もしています。いいえ、大船渡からいただいた賜物でしょうか。監督の鈴木さんが、その機微を嗅ぎとつてくれ、じつにはつりと、さりげない映画ができました。

東日本大震災はむろんのこと、人生で二度も津波を経験し、そのたびに家を失つたおばあさんもあります。その波瀾万丈は、どこか、恋多きひとの結婚と離婚に通じ合う気がしてなりません。それでも、美しい、離れられないと海辺に生きる姿は、大波ごとに、土地への愛憎をしんしんと深めていらつしやる。人間の男とも結婚したけれど、海ともつがったおばあさんたち。

詩の書き手のわたしにとって、おんばたちの詩歌との出会いもときめきでした。詩映像に秀でる鈴木さんによつて、それを運ぶ極上の乗りものができたとも感じます。三陸海岸のおんばの人生、そこかららるらると湧き出たことば、詩、うた、それを運ぶ声のいろ、しぐさ、目の愛くるしさが、鑑賞のみなさんの胸に届きますよう。

アイオワ大学准教授のケンダル・ハイスマンさんと日本語を学ぶ学生たちの協力で、英語字幕も添えられた本作は、アナトリア国際映画祭2020(トルコ)、ヘリオス・サン・ポエトリーフィルム祭2020(メキシコ)での正式出品、ナンソー映画祭2021(米国)ではオナラブル・メンションをいただき、世界最大の歴史あるアジア研究の学会、Association for Asian Studies が主催する映画祭でも上映することができました。

映画になり英語になり、東北おんばは地球規模の「みんなの海のおばあちゃん」に高まつていくのかもしれない。震災後一〇年の節目、この三月からは一般公開を始めて、皮切りとして三月二日に、東京・下北沢の本屋B & B主催でオンライン上映会を行いました。五月には地元・大船渡のホールで上映されます。

コロナ下ではありませんが、みなさんの町や教室や集会以、オンラインを含めて企画などがあれば、ミテ・プレス(mite@ce.och.ne.jp)に相談ください。

十二月八日

高野吾朗

バス停にぽつんとある 二人掛け用ベンチは
横になって眠るには あまりに小さく 狭い
腰かけ部分の中央にも 鉄のひじ掛けが一つ
据えつけてあるせいで 寝そべるのは無理だ
座ったままの姿勢で目を閉じるしかないのだ

始発のバスが そろそろやって来る時刻まで
夜通しずっと そのベンチで独り眠っていた
あなたは 他の人影を感じるや 冷たく硬い
この唯一の居場所に 身を切る思いで優しく
別れを告げると 今日も街の雑踏へ紛れ込む

人間の姿を捨て 野生の猿と化したあなたは
街路樹から街路樹へ 建物から建物へ 光の
ごとく飛び移り 車道や歩道を疾走していく
匿名であることの悦びと 無名であることの
悲哀と 昨日の最後の食糧を口に含みながら

あなたが走る街は 行き当たりばつたりの街
道楽だけの街 真剣味のない街 いい加減で
でたらめの街 自分が何者であるのかを全く
理解できぬ街 あなたに驚く人々に 「この
足を舐めなよ」と嘯くあなたに 故郷はない

遠方で誰かが 拡声器を通じて絶叫している
「記憶しよう あの年の今日 十二月八日を
あの日 世界の歴史はあらたまり 鬼畜らの
主権は 我ら人間界の陸と海に否定された」
「鬼畜とは私のことか？」あなたは苦笑する

あらゆる規則も境界線も無視して あなたが
動けば動くほど あなたを追い回す者たちの
数も次第に増えていく 彼らの誰もが 必ず

別の誰かの敵だったが 誰の心も 奥底では
「生まれてこなければよかった」と反復中だ

車のボンネットからボンネットへと飛び移り
高速道路を爆走し 次から次へと 街を変え
ようやく初めて あなたは別の猿に遭遇する
ケージの中に閉じ込められている その猿が
こつこつ書いているのは 謝罪の手紙だった

誰に向けられた謝罪文なのだろう 「返事が
もらえるだろうか 逆に脅えさせるだろうか
喜んでもらえるだろうか それとも無視か」
何度もそう繰り返すこの同胞の目に映るのは
あなたの強さのみで あなたの弱さではない

何もしてやれぬまま 同胞と別れたあなたは
走り疲れたのか 電波塔の頂上で眠りを貪る
目覚めると あなたは何もない空間に独りだ
しかしそこは 目に見えぬもので満ちていて
あなたの体は圧迫され続け ついには碎ける

再び目覚めると 最終バスはすでに走り去り
バス停のベンチには雪がうっすら落ちている
また座ったまま眠っていたあなたの膝の上の
食糧は 空腹に耐えられず あの同胞に夢を
全て売り その代償として得たケージの餌だ

あなたの目前に 片手に金属バット 片手に
毛布を抱えた男が立ちはだかる 「いつまで
そこにいるつもりですか」バットで襲う気か
毛布をくれる気か あなたの気づかぬうちに
膝の上の食糧が 一通の手紙へと置き換わる

「それ 遺書ですか」問いかけに応じぬまま
あなたはまたも念じ始める このひじ掛けが
いつの日か撤去されますように そうなれば

からだですよ

その絵模様は

ミケムチのつがらうこのでまがるしよ、猫なれば、おもての毛色が違つてもニヤニヤ、子おべせえるがしよ。

ドンニヤ一ほど離れておるんじやありやアせんか。牙剃ぐか、ヒツ掻ぐか。それほど違つたらね

えのすか

黒揚羽と

青条揚羽は

黒なれば柚子だの山椒、青なれば楠の葉ツバ。芋虫、毛虫の頃からしててんでんの菜ア喰んで、しゃぐしゃぐしゃぐしゃぐ 同なアし着色で喰みつづけて、挙げ句の果てア、同なアし形になり申したでねえのかい。ええ、おまいさんらは、だアども 断じて交わらねア、決して同釜できねアと、ぶぐぶぐぶぐぶぐ 細いペロの尖りおりやア、

本質だよ

羽の絵模様をまこそが

股間ですよ、太腿ですよ、バダフライにとつてみりやア、色柄が、感受性なのですよ。

羽裏に、目玉模様を隠しておるのもいるがしよ。南洋の密林す、ふあらふあらふあらふあら、飛びまわつて。空きツ腹の小鳥めのくちほしが突進すりやア、

バツと

もんどり打つて、内羽ひろげ、ギョロ眼の一对、空中サ立ちやアがり、猛衝へ演じてみせるといふでないか。シツボを巻くといふでないか、天敵に蹴返イされて、鳥ツペア。

騙し絵ではねえのすよ。偽せ絵なんかでないのですよ。言つたでしよ、さつきわたしは、蝶々の色模様は、感性ですよ、実存ですよ。そげなモンが運動し、官能し、目玉乗せで、タンタンタン、空中タンゴを踊り出しやア、

キヌラだよ

びつくら放ぐがよ

小鳥たちが、大鳥たちが、

人間たちが

模様アねえ

強いんですよ。

ぼろやりと

藍の色が

からたみ浮かんで

しやぐしやぐしやぐしやぐ

喰みつけておるつげえ。

歯立てで

何になろうとしておるのか

わたしの肌で

山のどく脱糞している

模様という生きもの

けもの

覆われて

(Lost & Found 33)

【トルコ語詩の翻訳 84】

詩人アフメッド・アダの七編の詩

訳 イナン・オネル

恋愛 十三

ナズのために

雨の一日中つぼになる喜び

中庭で、すぐその庭で

鳥が枝を移る

時間はどこにあるのか、見えない

もう長々と見ることができる

あなたの陰った目を、半開きのドア越しに

時間をわたしは忘れたのであろう

ただ死のみを思い浮かべる

もはや快楽に耽る

恋愛のためだと言われ、樹木の

海へと歩くのを見る

昔は野草も枯いたと言われる

ああ、恋愛、消えゆく雨の音

わたしの中で、そして世界の心臓で

息もつけずに愛し合つて、わたしはわかる

恋愛、時間に刻んだ詩篇にて

恋愛 十四

海、無数の輝きの上

イチジクの木影にて、あなたは、

海で魚が寝惚けて、回る

立っている真下に全裸で、

太陽を失つて

これらは自然の動き、

大地の風、水の輝き

初夏が風を追う

あなたの髪において

何重にも花、薔薇、白く

雀の降りる樹、ふと雨が

細い雨が降る樹へ、鳥へ

きつとわたしたちが雨を家へ運ぶ

海の近くに住んでいるから、目が覚めて

夢を見る、あなたと共に

歌を歌う遠くへ向けて

並んで一緒にヒヤシンスの球根を植える

ああ、恋人よ、あなたは光の泡だ、

あなたの動きも重い影

辛い年月を超えるあなたの体は

翼を広げ、星を飛ぶ

恋愛 十五

石、砂、貝殻

重くないから、運ぶそうだ、庭へ

あなたの心は寒がる

風の影にて

軽い花、白く、揺れる

軽い風邪で、あなたの心が覚める

夏のハンモックにて動く

輝くカタツムリの跡

失われた年月である苦痛は、あなたの

目において古くなり、枯葉になる青葉

飛び回る、あなたの心において

苦痛を運ぶわたしたちはあなたの心だと思つて

捕えるために追う、わたしたちは風を

恋愛である、滑り失せていく私たちの手から

鳥の声で目が覚める

私たちの中で、あらためて

恋愛 十六

引越していくのは小石ではない

海へ投げれば海底に残る

終わるわけではない、自然の冒険

絶え間なく続く多くの事柄が

季節が変わったとしても

あなたの愛は絶え間なくあなたに形を与える

苦痛が訪れても色褪せたあなたの顔を

太陽が沈み月が昇る

イチジクが成熟する

雑草が伸びる、獣道で

世界の騒音に

森の音楽に耳を傾ける

とある鹿、死んでいった他の鹿に面して

トロス山脈はそれでも遊牧民である

海に面して永遠を勉強する

不死の告報を叫びたくなる

ミスイス橋の上で賢者ルクマーン

わたしは分かっている、地中海の人は頭から

足指の指先まで恋愛で出来ている、静かに内側へ曲
がる

長い旋律の歌で養われる悲しみ

暖かく傷ついてあなたと歩き出す

メルスインの市場を

赤い恋愛で

恋愛 十七

今日は荒れ狂う海

一枚一枚葉の剥がれ落ちるわたしの人生に似ている

わたしは縄を渡る軽業師だ

溢れ出る愛を安定させようとしている

わたしは花が咲く樹木の歌を歌っている

ポピーの歌を、小麦の歌を

外で千本の枝に千羽の鳥の囀り

わたしの純朴の歌に力を与える

ああ、わたしはいかにも初心者だ

わたしに叫びを与えるあなたの

恋愛 十八

もはや草原の中で囀る鳥ではなく

あなたを癒すのは詩である、詩である

すべての言語を旅する

言葉である、愛が溢れ出るのは

旅する口から口へ世界を

人間が崩壊しないように

恋愛 十九

ああ、わたしはあなたをどれほどにも悲しませた

心を挫いたわたしはあなたの恋人よ、今

あなたはどこだ、どこへ向かっているあなたの道は？

どこかの海外のとある島にいるのか？

かれらはわたしを「狂人」と呼ぶだろう

「ありがとうございますに気付かず、書物にぞけり

生命が荒れる川のごとく流れていたのに

かれは自分を小さな島だと勘違いしたようだ」

ああ、恋人よ、わたしは弁明しようというのではな
い、

わたしはあなたへの坂道であつた

あなたは疲れた、とらえることができなかつた、わ
たしの孤独の

内側を吹き過ぎる風を、あなたは焦がれた

ああ、恋人よ、どれほどに会いたいか

あなたに、そとで雨が降っている

わたしの中で続いているあなたの囀る声

あなたはどこだ、どこだ、どこだ？

(つづく)

わたしはタバコを吸う

笠間 直穂子

二〇一一年のデビュー・アルバムで注目され、バルバラと比されることも多いL (エル) コントラファエル・ラナデルは、二年ほど前に所属レーベルとの契約を打ち切り、パリを離れて、故郷というわけでもないブルターニュに移り住んだ。独立第一弾となるアルバムを発表して間もない彼女が、先日フェイスブックに投稿した文章に、目が留まった。

いろんなミュージシャンの書き言葉がじかに届く時代だが、彼女の語り方は、面白い。間を置いて言葉を継ぎ足しながらささやきかけるような、読点の多い独特の文体だ。

投稿は、こんなふうに始まる。

二十五年前から、二月八日というのはいつもわたしにとって特殊な日。この日は聖母や予兆を見たり、コンサートをダメにしたりしてしまう、酔って、亡霊に話しかけるとか。いつも少し憂鬱になる。この日はムーズ県の祖母、母方の祖母を思い出す「∴」

二十五年前の二月八日に祖母が亡くなったという意味なのか。そこを曖昧にしたまま、祖母がどんなに優しく朗らかな信心深い女性だったかを語ったのち、次の言葉で投稿は締めくくられる。

わたしの子ども時代のもっとも高い灯台、そして唯一の真に穏やかな港だった女性のことを、わたしは思い……

歌い……タバコを吸う。

付された動画は、自宅(たぶん)で、自撮りで、化粧つきの顔で、スマートフォンの疑似オルガンを一人ズンチャツチャと弾きながら歌う「わたしはタバコを吸う」。デビュー・アルバム『イニシャル』収録の一曲だ。音質も画質も悪く、歌う音程も不安定だが、かえって彼女の音楽や文章のもつ親密さと合っていて、心に響く。

この動画と投稿を見て、疑問が解けた。この曲を、わたしは恋愛の歌だと思いこんでいて、それにしては歌詞の意味がよくわからないと思っていたが、祖母のことを歌ったものだったのだ。

過ぎ去る日々は

いつも同じように

外で遊んで

泥だらけになる

あなたの懐の深さと

気ままな暮らしがあれば

過ぎる時間の

味は甘い

粉砂糖と

いくつかの詩

それ以外はもう

どうでもいい

そしてあなたの 好きよ を

わたしは集める

あなたの膝の上で

眠りこむとき

以来、わたしはタバコを吸う

あなたの声を思い出すため

あまりにタバコを吸いすぎる

どうしても吸ってしまう

なぜならこのタバコの葉の

えぐい苦みのなかに

あなたがひっそり言っていた

言葉の味がするようだから

祖母がいた幼少期の甘い思い出と、タバコの苦み。一見、合わないようであるが、この組み合わせは、納得がいく。

酩酊する感覚、眩暈の感覚を、彼女の歌詞はよく描く。タバコは、覚醒するような、朦朧とするような意識になる上に、煙につつまれる。霧を吐き、霧が漂うのを眺める。そうしていれば時間が経つ。タバコは追憶と相性がいい。

晩になると、しずかに
あなたはカードを引き抜き
わたしたちに
秘密を明かす
そしてあなたの目が光るのは
わたしたちに
架空の世界を生きさせようと
船に乗りこむとき

だいぶ遅くなって
子どもたちがもう
あくびなしには
ついていけなくなると
あなたはカードを片づけ
そして、キスをひとつして
今夜は
子どもたちを解放する

このあとふたたび、「以来、わたしはタバコを吸う」のリフレインが来る。ベッドでタバコを吸わないで、ではないけれど、タバコだから恋愛関係の歌かと安直に思っていたわたしが、こうして確認してみれば、描かれているのが祖母であることは明らかだ。

とはいえ、官能的ではある。ここがラファエル・ラナデーレの肝だろう。彼女をつくる歌は、官能的だが、特定の男性に向かっているようには見えない。では同性愛者なのかというと、そうかもしれないが、それが管え、という感じもしない。もちろん、自己愛に充足しているの

もない。誰か／どこかに向かっているのだが、対象が拡散している。

と、ここで思いついて、「わたしは」で始まるタイトルをもつ、彼女のもうひとつの曲、「わたしは加速する」の歌詞を確かめると、リフレインはまさに、次のような文句だった。

あなたがいなくときのほうが、わたしはあなたを愛している
あなたはわたしのことを思ってくれている
とわたしはつぶやく
そしてあなたを失うとき
発つて、わたしは加速する

情の強さが、実在の対象をはじいてしまう。対象から解放されることによつて、情の純度が増す。辻褄が合わないようだが、どうしようもなく、そうなるときがある。Lという歌手は、そんなことを歌っているのではないか。エロチスムとは、そもそも、そういうものかもしれないけれど。

Je fume

Paroles et musique : Raphaële Lannadère
L, *Initiale*, 2011.

J'accélère

Paroles et musique : Raphaële Lannadère
Raphaële Lannadère, L., 2015.

まるで当たり前のように

中村祥子詩集『まぶしい朝がきて』書評

樋口良澄

震災前の三陸沿岸の海を私はたびたび訪れていた。唐桑半島 気仙沼 釜石……。リアス式の入り組んだ湾と山 海 空 点在する小さな島々。海はときに青黒く、ときに輝くような緑青で、毎日違って見えた。人々の生活圏である海を、里山という言葉を採用して「里海」と名付け、そこに生きる人々をめぐる仕事だった。海は豊かで大量の魚介がとれ、私は訪れるたびにおすそ分けにあずかった。

しかし、震災がきて風景は一変した。被災して仕事や家を失った知人の何人かは、あつという間に亡くなってしまった。人間にとって仕事や住む場所は、生死を決する要だということが痛いほどわかった。震災前の風景を記憶できてよかったと思つた。

震災から十年がたった。それを機に、多くの出版物が刊行されているが、このたび刊行された中村祥子さんの詩集『まぶしい朝がきて』は重要な仕事だと思ふ。詩集は大きく三部に分けられ、Ⅰに主に震災以前、Ⅱは震災や復興と直接関わるもの、Ⅲはそれを俯瞰したもので構成され、緩やかに重なりあっている。中村さんは大船渡在住で、震災を体験した。被災当事者による「震災詩」という位置づけになるのだろうが、あまりにも巨大な現実を描くことがいかに困難な作業であるかが伝わる作品群になっている。

本書は彼女の最初の詩集である。表題作「まぶしい朝がきて」は震災直後の緊迫した状態の中、父親を亡くした体験を描いたもので、「いわて震災詩歌二〇一七」の最優秀作品に選ばれ、女性詩人の英日対訳アンソロジー『POET & POET』(Recent Work Press, 2017)にも選ばれている。震災直後、多くの死者のために霊安所も火葬場も順番待ち、親族も被災し身近な死を抱えながら駆けつける情景が、この作品には、「」や改行

のない散文詩形で緊迫感を持って描かれる部分がある。個人的な喪が、兄弟、そして震災のたくさんさんの喪と接続し、一種、黙示録のような世界として描かれる。例えばこんなふうだ。

霊安室は満杯です棺は被災者様の分です●が押さえているのでどこに行っても一般の方にはあそこ見えずい煙土は回路なし火事じゃないのかこの先通行止だれか消防車を家族が見つからないんです尋ね人はここに記入ください急げ消防署まで走れ走れ仮装は順番待ちです担当が呼びに行くまでお待ちください

個人を越えた圧倒的な現実、しかも急迫している。何かを書くことはできるかもしれない。しかし、言葉がその現実になど寄り着くことは、はたして可能なのか。

この詩がその困難を超えて、震災直後の状況をリアリティを持って描けたのは、作者が「父の死」という個人の喪を手放さず、それを通して状況を見ている一方で、被災の全体を、兄弟の声、名も知れぬ他者の声や看板の言葉としても描いているからだろう。そのとき、詩の語り手である「私」は消えアノニマス(無名)なものが召喚される。読者は、個の喪に焦点を絞られながら、アノニマスなものの交響を、作者を通して聞くのである。

しかし、個の喪と全体の喪は安易に繋がるものではないことも、見過ごしてはいない。引用部分の「霊安室は満杯です棺は被災者様の分です●が押さえているのでどこに行っても一般の方には」のように、「一般」でない「●」が持つ特権という社会的な選別が、この緊急事態においても起きていることがさりげなく描かれている。

同じく父の死を扱った「賤い」、「ある死の傍らで」では、はっきりと「トリアージ」(生の選別)という言葉が使われている。最近の新型コロナの蔓延で、限られた数の人工呼吸器をどの重症者に優先的に使うかという議論の中で話題となった言葉だ。「延命措置をどうしますかと訊かれたのは／昨日だったか一昨日だったか／階下ではトリアージが始まっていて／誰も話題にしよう

とはしない（一行あき）もういいですから／助けられる命を優先してくださいと／懇願した娘の罪を背負って／ねっとり絡んだ痰が／父の気管をいつそ塞ぎ（「贖い」）。個人的なものと同情的・集合的なものは、時に対立する。それは作者のアノニマスなものにならうとする試みを困難にしかねない。

被災の現実は一一人異なる。異なるだけでなく、同情的・集合的なものと時に拮抗することもある。詩集のうち、個人的なものと同情的なもの、日常と非常（また非情でもある）との連続／拮抗の層を深く凝視めた作品は、震災を描くことに成功しているように思える。〈正しさ〉に足を取られ、どちらかにかたよった作品はつまずいてしまったように感じることもある。連続と拮抗は、そう簡単に解きほぐせるものではないのだろう。

しかし、連続を探ることは、この詩集の強いモチーフとなっている。刊行日が三月一日となっており、「震災の詩」を書くという意思が明確に示されているにもかかわらず、その試みを内側から揺り動かすかのように、連続性が探られる。そこには、二つの中心がある。

一つは〈父の死〉だ。先に書いたように、父の死から凝視めることにより、作者は現実をとらえる確かな視点を獲得した。しかし、それと同時に罪障感を抱えることになる。看取りから葬いの過程を十分なし得なかったという思い、人々が苦しんでいるのに「個人的な」喪失にとらわれているという思いなどだ。過去は、震災と結びついた意味が与えられ、夢も予知夢として読まれる（「予知夢というなら」1、2）。震災は、それ以後だけではなく、それ以前の作者の人生にまで影響を及ぼしてしまったことが、詩集からは読み取れる。だから、震災を書かなければならなかったのだろうか。

一方で、父の死と二〇一一年三月一日とが重なったことは偶然であり、見方を変えれば、作者の生涯を変えてしまった非常は、日常と連続した出来事としてとらえることもできる。その連続の究極は自然だ。地震や津波は、原発事故とは違い、自然に起因するものであり、人の生も死もそこに

属する。詩集のもう一つの中心は、この自然だ。〈父の死〉と自然。それは個の喪と全体の喪、日常と非常をつなぐものでもある。

ただし、その自然は圧倒的な力を持ち、人を突き放す。人の思いなど手の届かないところで輝き、逆巻き、人を時に襲い、時に癒す。「海に生きるどゆらどゆ」という作品に記された「義父」の言葉に、土地に蓄積された自然観が語られている。

始まりやアみんな海からだ海があつたがらうすて栄えてエ海のおかげで生がされてきたんだがらなア／同じだぐ土イ耕して来たもんが死んだら土を還ると語るよにま板子一枚で生きてまア海を還るんだもんまア当たり前だよそれが海に生きるどゆらどゆつたア

この言葉を読むと、大いなる自然の前に、素直に頭を垂れたいくなる。私が見た震災前の輝ける浜辺と瓦礫が散乱した世界は、大いなる循環の中にあるととらえるべきだろうか。しかし、おそらく作者は、そうであるとも言うだろうし、断じて違うとも答えるだろう。震災直後の朝を「まるで当たり前のように／まよふも／まぶしい朝が来て」（「まぶしい朝が来て」）と書くことが、作者の到達した場所だからだ。

「まるで当たり前のように」。日常が非常に貫かれていることを表す、シンプルで強い言葉だ。津波の後も「まるで当たり前のように」、夜が明けるといつものように輝く朝日が上る。詩が震災を描くことは、連続／拮抗への透徹した認識であることがここには示されている。シンプルで、易しい、なんの変哲もない言葉が、時に強い力を持ち、うらむことをこの詩集は教えている。

中村祥子詩集『まぶしい朝がきて』（私家版）

問合せ等は、中村祥子(sachiko.suzusiro@gmail.com)

*「西脇順三郎『スペクトラム』への旅」は今は休載です。

新井高子

震災後十年の三月。唐十郎とつながる出来事を書きとめておきたい。二〇一年のその春、原発事故のあと、いわき在住のわたしの兄の家族は桐生の実家に疎開した。その織物工場もたびたびの停電でろくに仕事ができない状態だった。そんなある朝、わたしは帰省を思い立った。家族の顔がちょっと見たくて。

東武伊勢崎線の特急電車「りょうもう号」の始発駅、浅草に着いたのは午前中だった。だが、間引き運転のさなかにも関わらず、時刻表の確認をしなかった行き当たりばつたりのじぶんには足を取られた。本数が少なく、日帰りは無理なのだ。大所帯になっているその家に一泊するのは控えたい。電話もしないで、ひよと驚かせようと出たのだから、じぶんのずぼらさをただ惨めに思いながら、浅草寺をお参りした。

すると、腹がへつてきた。しょげたところで腹はへるのだと妙な感慨をたずさながら、前にもなんどか行つたことのある味自慢の小さな食堂に入った。ちょうどお昼どきゆえ、五、六人の先客がいて、輪の真ん中には威勢のいいおかみさん。そして、彼らのおしゃべりが耳に入つてほどなく集つていのは、近所の面々だとわかる。七十代くらいのおかみさんを囲み、幼なじみにも見えず、同世代のおじさんたち。いつ放射能が降つてくるか、いや降つてくるのか……。そんな時勢に、わざわざ観光する上客はいなかった。

話題はもちろん震災のこと。落つただの、壊れただの、故つたらかしたの、やるせない空気にはなつていた。その見物の棚も倒れたとのことだったが、にわかに野太くなったおかみさんの声は、こう切り出す。「おい、〇〇。おまいは、民生委員だったな。呼びかけられた〇〇は、顔を上げる。「民生委員なら、民主党の音に、連作らせろや」。

当時は菅直人政権。関東と東北を結ぶ道の多くが切断や封鎖の状態だったのは言うまでもない。ニヤツと歯を見せたおかみさんは、「あそこに行きやあ、宝の山だぞ。あつちには大判小判、こつちには金の延べ棒。ツツツツツと音に、真つづくの連作らせろや」。

しよつたれた一介の民生委員が、同じくしよつたれているとはいえ、一国の総理大臣に談判するコネがあるはずがない。道路も一夜城じやない。つまり、民生委員と民生党のゴロの良さが繁いだこのあたりは、沈んだ場に威勢を授けるために、おかみさんが打ち始めた「ひと芝居」。その意は、おのずと伝わつて、ふつふつ笑い声が湧く。「おい、△△。おまいは、軽トラ持ってたな。カソリンは満タンか。震災泥棒の女頭領になりすますおかみさん。「おお、いつだって、腹たつて満タンだよ」。当道即妙な△△。たちまち食堂は笑いの渦になる。

誤解があるといけないから書いておく。そんな体力さえありはしないマツタリ集団ではあつたものの、おかみさんには泥棒になるつもりも、怪盗団を組むつもりも毛頭ない。敢えて空言をかたることで、こつちの勢いだけを分ち合おつたに過ぎない。もちろん、不謹慎スラスラではある。こゝに記すことしたい、『ミエ』という極小空間だからできるとも思うが、ともあれ、ブレスに真意が伝わるつきあいの範囲で、ある種の毒を予解し合いながら、なげなしの活気が、ひと芝居として演じられた。おほれのわたしをただ一人の観客にして……。

さすが、唐十郎が愛する町だな、と思つた。自粛ムードがキナ臭さに転じかねないことにも勘付きつあつたが、世田谷あたりでは、マスキ色の深刻さに飲まれてしまい、こんな賑やかなやりとりに出くわした試しがなかった。

唐さんにこの一件を話したのは、初夏あたりのこと。唐組の役者たちと高田寺の焼き鳥屋で飲んでいた。唐さんの真には、教えきれないほど座つたが、畏れ多くてわたしのほうから長い話をしたことはほとんどなかった。だが、これを語り出すと、目が輝き、「そうか。そう言つてたか」。

思えば、唐戯曲の怪優たちのせりや回しの原型とも言えうだが、さらに「芝居とは何か」という問いもわたしは探つた気がする。

振り返れば、桐生の実家の工員さんたちのお茶休みななども、似たような光景はあつた。おしゃべりの真ん中に、威勢のいい、けつきまはは腕もいい女工さんがいて、話題を振りまきながら、誰かの口調のマネ社長、つまりわたしの父だったりするのだが……。などが始まる。それが可笑しい「ひと芝居」になる。大船渡で出会つたおんばたち、なかでもコマダイエンスの不二子さん(映画「東北おんばのうた」出演者)などは、ぶたんからこまでかほんらでどこからかうまのかかわらない口ぶりだが、その軽妙さのまま、いつのまにか「ひと芝居」が打たれ、カモられたわたしは、けつきよく笑いの渦で溺れるしかない。

民俗学などでは、芸能のはじまりを問うと、どうしても神が出てくる。神なるものの寄り代としての巫子(ワコ)が役者の原型の一つであることに異論はないのだが、真剣すぎるほど神がからない、巷のこつちの遊びの精神も見逃さないのではないが。

つまり、いま、芝居のマネとしてとらえられている、つかのまの「ひと芝居」の振る舞いのほうから、それは始まつた。少なくとも、そういう面もあるのではないか。唐十郎戯曲のせりぶりがかくも生き生きとしているのは、この系統から来た口ぶりや毒もまだ、みやくみやくと組み込まれているからだろう。

唐もその浅草の面々も、東京下町が一夜で見渡す限りの焼け野原になつた空襲と、その後の混乱期を、幼少期に知つた世代でもあるな、とも思う。